

概要報告

実施期日	7月29日(月)【午前】
部会名	小学校 総則部会

テーマ

『特色ある教育課程編成のためのカリキュラムの見直し』

～つながりあい高めあう子どもを目指して～

提案概要

提案校では、学校教育目標「かしこく・なかよく・たくましく」の達成に向け、今年度は「つながり」をテーマに気付き合い、学び合い、高め合う子どもを、目指す子ども像として、新学習指導要領の全面実施を見据え、カリキュラムの見直しについて研究を進め、カリキュラム・マネジメントの考え方を生かしつつ特色ある教育課程の編成に取り組んでいる。

【実践の概要】

高学年の児童像に至るステップを意識しながら、ブロックごとのめざす子ども像について話し合い、教職員間の共通理解を図った。

低学年ブロック	ともだちの思い、考えをきける子	(話の中心をとらえる)
中学年ブロック	聴き、共感したり比較したりできる子	(自分の考えと比較する)
高学年ブロック	考えを深め、表現する子	(自分の考えを構築できる)

また、目指す子ども像の実現のために必要な内容なのか、学年ごとの教科横断的な取組、年間指導計画、さらに学校行事等の精選を行った。

- ①レインボーマつり（縦割り活動） → 高学年主導の活動から、各学年の取組を披露する活動へ
- ②やきいも大会 → 異学年交流の場から、学年ごとに役割分担した活動へ
- ③2分の1成人式 → 保護者への感謝を示す場から、子どもたちの成長を見届けてもらう活動へ

【成果と課題】

- ・様々な学習過程で「伝え合うこと」「高め合うこと」ができているという教師の見取りができたこと、なによりも子どもたち自身に達成感がみられたことが成果である。
- ・学習評価についても児童の学びの結果としての評価にとどまらず、教育課程や指導方法に対する評価と結び付け、授業改善に向けたサイクルの中でとらえる必要がある。
- ・児童の実態に加え、変化する家庭や地域、環境の実情を的確に把握しつつ、学校がイニシアティブを発揮して、物的・人的リソースを活用していくことも課題である。
- ・学習内容の時間配分についても優先順位を付けなければならない。加える（ビルド）だけでなく、なくす（スクラップ）も含めて「恒例だから」ではなく、ゼロベースで教育課程の編成を行わなければならない。

質疑応答

Q：インクルーシブ教育の観点から、支援級児童、配慮を要する児童に対して同じ活動をさせるためにどういう取組をしているのか。

A：支援級担任等と打ち合わせを綿密に行い、できること、できないことを見定めながら進めるようにしている。

グループ協議

学校独自の教育課程の改訂作業や各学校の取組の内容について協議を行った。

【学校行事に関して】

- ・学校行事等を行うための時間の確保が難しくなっている。

学校行事に関しては何を精選していくべきか等、考えていかなくてはならない時期になっている。

【学年行事について】

- ・自校においても、2分の1成人式を実施することの意義が薄れてきており、継続すべきか検討している。

【たてわり活動について】

- ・クラス数が少ない学校は活動として成立しやすいが、クラス数が多い学校には難しい場合がある。
- ・適正な規模というものがあるので、すべての学校で取り組むということは難しい。
- ・1グループ30人規模のたてわり活動を行っているが、交流の意義が生かされているか疑問に感じる。
- ・目的意識をもち、取り組むことの意義についてしっかりとと考えていかなくてはならない。

まとめ概要

- ・大切なことは学校教育目標を実現するための教育課程をいかに構築していくか。
- ・保護者、地域等に対して、きちんと自信をもって説明できる取組を考えていく。
- ・行事に関しては、実施当初の教師の願いや時代背景があるが、刻々と変化する子どもの実態も視野に入れ、どういう力をつけることが子どもたちにとって必要なのか、見直しを積み重ねていくことが大切である。
- ・地域の教育資源をもう一度見つめ直し、タイミングや学校規模等を考慮しながら、有効に使う手立てを考えていく。

概要報告

実施期日	7月29日(月)【午前】
部会名	小学校 国語部会

テーマ

『学習意欲を高める学習指導の在り方について』

提案概要

提案設定の理由

新学習指導要領でうたわれている、新しい時代に必要となる資質・能力の一つに、「学びに向かう人間性」がある。問い合わせや課題に対して教師がどのように働きかけければ、児童が「やってみたい。」「解決したい。」と前向きに課題に取り組んでいけるのか。児童の発達段階に応じて考えていきたいと思い、このテーマを設定した。

学習指導要領との関わり

(新) 第3章 第1節 第1学年及び第2学年の内容

1 [知識及び技能] (1) 言葉の特徴や使い方に関する事項

ア 言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと

キ 丁寧な言葉と、普通の言葉との違いに気を付けて使うとともに、敬体で書かれた文章に慣れること

2 [思考・判断・表現等] A話すこと・聞くこと

ア 身近なことや経験したことなどから、話題を決め、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと

オ 互いの話に关心をもち、相手の発信を受けて話をつなぐこと

単元について

この単元で中心となる言語活動は、「尋ねたり応答したり、2人で話し合って考えを1つにまとめること」である。つまり、クイズを出し合うという活動の前の、話し合って合意形成を行うということに重点が置かれている。出題者の2人は、与えられた題材をもとに、ヒントを3つに絞り、さらにヒントを出す順序を考える。クラスの解答者は、答えに迫る質問をして、正答に近づけていく。クイズでは、答えになる題材の特徴をヒントに挙げるため、「色・形・働き」などの観点に沿って、題材を詳しく思い出すことが大切になる。また、話合いをするためには、まずは自分の考えをもつことができ、それを言葉にすることができるかが重要である。

また、児童は1学期の既習単元「くちばし」で体験した「これは、何のくちばしでしょう」の学習を踏まえ、10月以降より日常的に「これは何の生き物の耳でしょうクイズ」を経験してきている。このクイズは、教師から出すクイズで、聞く力や質問する力を高める目的で行なっているものである。継続して取り組んできたことで、子どもたちの質問の質が上がってきた。また、続けていくうちに子どもたちのほうから「次は自分たちで問題を出してみたい」との声が出てきた。子どもたちの声から出発して授業をつくっていくことができてよかったです。

成果と課題

毎時間のクイズの時間で、質問の仕方を習得する場面を設け、本単元の終盤では、今までの知識を活用するクイズ大会の場面を設けた。そのような学習活動の設定と学習の場の構成が、児童の学習意欲向上につながり、また相互に話し合う活動を通して、深い学び合いにもつながったと考える。また、児童が理解しやすいと思われる言葉を吟味して、毎時間のめあてを設定した。教師の毎時間のねらいを明確にし、さらに、児童にとって学習の見通しがもて、楽しそうだと感じられるような言葉を選んだ。「児童に伝わる言葉」にすることで、本時が何をねらっているのかが、1年生の児童でも理解しやすかったのではないかと考える。児童の振り返りを見ても、「言葉のキャッチボールが少しできるようになった。」「ツッコミの達人になれた。」など、めあての言葉を用いた振り返りをしていた。

課題としては2つあげられる。1つはペア学習を取り入れたが、児童にペア学習をおこなう必要感、必然性をここまで意識させることができなかつたことである。それは、ワークシートにヒントを考える欄が5つあることで、児童は「5つすべて書き込みたい。」という気持ちが強くなってしまったからだった。それで、なかなかペア学習に入ることができない児童もいた。そのあとの学習も、ヒントの順番まで考へるので、活動内容が多かつたことも

要因の一つかと考える。2つ目は、ワークシートの構成だ。2・3時間目では、まず1人でヒントを考える時間を経てからグループやペア学習に入った。しかし、1人で考える内容と、グループやペアで考える内容の切り替えに戸惑う児童の姿が見られた。またワークシートも、それぞれの内容をどこに書くのか分かりにくく、ワークシートの構成などを工夫する必要があった。

質疑応答

質疑応答はなかったので、提案者が課題だったと感じている「ペア学習のもち方について」「ワークシートの有効な使い方について」をテーマに、3～4人のグループに分かれて話し合いをしてもらった。

以下、グループの話しいで出てきた内容。

◎ペア学習のもち方について

- ・個人の時間→ペア学習することで、1人で考える時間の確保ができていて良いと思った。しかし、ペアの必然性は子どもたちにとってどうであったのかは疑問である。
- ・ペアにすることで、自信がない子の手助けになった部分は大きいのではないか。しかし、ペアにすることで子どもたちの活動が制限された部分もあるのではないか。
- ・ペアで取り組むこと自体が1年生にとって大きなチャレンジ。子どもたち同士を関わらせることが大切だと思うので、良かったのではないか。
- ・ペア学習を通して、何を目指すのかが明確になっていると良い。ペア学習=主体的な学習ではないので、そこは気をつけなくてはいけない。

◎ワークシートの有効な使い方について

- ・学習の筋道が見えて良かったと思う。振り返りも簡単にできて良いと思う。
- ・単元を通して1枚にまとめられているので、評価にも使いやすい。しかし、1年生にとっては少し情報量が多いのではないか。
- ・子どもたちの実態や、学ばせたいことによって、ノートを使ったりワークシートを用いたりしている。教師がしっかりと見極める必要がある。

まとめ概要

- ・校内研究のテーマに沿った単元内容で、取組の意図がよく伝わってきた。
- ・「関心・意欲・態度」は育てていくもの。単元の終わりに評価すると良い。教科書の指導書では、単元の始めに評価することが多いが、単元の終わりにもしっかりと扱うことが大切である。
- ・ペア学習のあり方としては、必ずしもペアである必要性はない。目の前にいる子どもたちに、どのような力を身につけさせたいのか、ねらいをもって、やり方を決めていくと良い。
- ・学びのチャンスは、子どもたちとのやり取りで生まれることが多い。どう扱うか。どう生かしていくかは教師の腕次第。常にアンテナを高くして臨んでほしい。

概要報告

実施期日	7月29日(月)【午前】
部会名	小学校 社会科部会

テーマ

『学習をもっと身边に～地域教材を生かして』

提案概要

社会科の学習が始まる中学年は、社会科の目標となる公民としての資質・能力の基礎の育成のスタートであり、生活に直結した内容から始まっている。自分が知っていること、知らないこと、知りたいことを整理し、課題を見つけ、実際に見て聞いて学ぶことができる地域社会の学習はその第一歩に相応しい内容だと感じる。

しかし、学習が県全体に広がった時、その地に行ったこともなく、見たこともないものをいかに自分ごととして捉えさせるのが難しい。公民としての資質・能力の基礎の育成が目標ならば、もっと地域に根ざした教材を用いて学習してもよいのではないかと考えた。

単元は第4学年の「昔から今へと続くまちづくり」を扱った。本校には、昔からこの地域に住んでいて、学校の教育活動に対して協力的な方が多い。また、鎌倉時代の有力な御家人が治めていた地で、神明神社には銅像があつたり、祭囃子があつたりと古くから伝わるものがたくさんある地域でもある。

4年生は34名ずつの2クラスで、どんなことにも精一杯取り組もうとする姿がとても素敵な子どもたちだ。その反面、人前に立って何かをするとなると、自信が持てず、尻込みする子もいる。

社会科では単元の導入で必ずKWLシートを使用している。K（知っていること）W（知りたいこと）L（学んだこと）を整理する。これを使うことで、自分の課題が明確になり、より主体的に学習に臨めるようになったと感じている。

実践に向けての課題は、本単元で教科書に取り上げられている吉田新田で学習する内容を、どう身近なものとして捉えさせるのかということだ。本校からは遠い吉田新田のことだけではイメージが持ちづらく、単元目標にある「地域社会の一員としての自覚を持つとともに、地域社会に対する誇りと愛情を持つ」や「先人たちの働きや込められた思いや願いを理解する」に到達できないのではないか、身近な地域に置き換えて学習する方がより目標に近づくことができるのではないかと考えた。

単元指導計画の工夫として、国語の単元を入れ替えたり、道徳の「伝統文化の大切さ」や「郷土の文化に親しみ郷土愛を持つ」を、「昔から今へと続くまちづくり」の学習に合わせて実施したりするなど、他教科とも関連付けながら、教科横断的に年間指導計画を工夫した。

第1次の第1時は、オリエンテーションとしてKWLシートのKの部分を記入した。子どもたちは市の伝統や文化、昔からずっと伝わっているものについて様々な意見を出した。次の時間に地域の昔を知ろうとして、学区内にある寺の住職から、地域の昔の暮らしのお話を聞かせてもらった。

第2次からは、市の伝統・文化調べるにあたっての視点を持たせるために、吉田新田の学習を行った。当時の生活の様子や苦労、先人の思いやその後の生活についての学習を行った。

第3次は、これまで学習した視点をもとに、市の伝統・文化について調べ、プレゼンテーションをした。まず、KWLシートのWの部分に自分が知りたいことを記入し、その中から調べ学習のテーマを、祭囃子と神社、祭等の6つに絞り込んだ。それらを、インターネットや副読本を使用して調べたり、祭囃子については保存会に参加している方にインタビューをしたりして、調べ学習をすすめた。そしてグループごとに画用紙や模造紙にまとめ、プレゼンテーションをした。最後にこの単元で学んだことをレポートにまとめた。評価についてはプレゼンテーションの様子やレポートを重視した。

成果としては、今ある伝統や文化に昔の人のどのような思いが込められているのかを知り、それを大切にしたいという思いを持って欲しいという、私が求めていたことをほとんどの子が感じ取ってくれていたことが挙げられる。

課題としては、調べる内容によって資料がたくさんあるものと少ないものの差が大きくて、学びの深まりにグループ差が生じたことが挙げられる。また、6つのテーマ以外に「調べたい」と思って提案したけれど、選ばれなかつたものをどう価値づけていくのか、子どもたちの主体性と教師が引くレールのバランスの難しさも感じた。

質疑応答

Q：先生自身はどのような資料はどこで見つけてくるのか。

A：学校の図書館、市ゆかりの人物館で資料を探した。市文化資料館でも探した。学校の図書館で見つけた本の発行元を調べた。

Q：吉田新田のところの扱いの方は難しいと思っていたので参考になった。テーマを6つに絞って調べ学習をしたということで、祭囃子はインタビューできたということだったが、他にできたところはあるか。また、インタビューには、どんな時間を使っているのか。

A：インタビューは祭囃子しかできなかった。他の子たちが調べ活動をしている間に祭囃子の人を読んでインタビューをした。

まとめ概要

テーマ決めについて。グループでテーマを決める際、自分が本当に調べたいものでなかった場合、理想はやりたいこと別にグルーピングすること。子どもたちの主体性、やりたい、調べたいという気持ちをいちばんに考えてあげると、一人になってもその子の意欲によっては良いものができるのではないか。

調べ学習の資料の集め方。図書館専門員さんにお願いして、教科の関連図書を用意してもらう。地域、保護者を活用していく。人数が多くなると調べたりインタビューしたりすることが難しくなる。単元ごとにテーマを決めて資料集めをする。学年で共有していくと資料は広く集められるのかなと思う。最初にテーマを少し絞ってあげる。その後の疑問や調べたいこと、考えに広がりを持たせてあげるのは良い。

資料の集め方としては駅に行くと無料のパンフレットが置いてある。観光協会に資料をもらえないかと連絡すると資料をもらえることがある。インターネットの活用。3年生の市の勉強ではインターネット等を利用して航空写真を見せる。インターネットで調べると意味もわからずに丸写しする子がいる。資料を集めるだけでなく、資料中のわからないことも含めて調べられると良い。

グループ活動で友達同士でやると協力できて発表しやすいが、一人一人の途中経過をどのように見取るのかが難しい。それぞれやっていることが違う中で、新聞という成果物でしか見とることができないのはどのようにしていけばよいのか。途中経過のそれが調べたこと、学んできたことが残るようにしていきたい。

調べ学習では、さあ調べろ！と放置してしまうとどうしても4年として学ぶべき方向に行かないことがある。今回は第2次で吉田新田を扱い、先人の努力工夫を学ぶことで、地元の先人についても調べる視点を明確を持って取り組むことができた。調べることが目標になるのではなく、社会科としての公民的な資質・能力の基礎を養うには、何をどのように学ぶのか、どのように身につけていくのかを考える。どのようにすればより良い暮らしに繋がるのか、豊かな社会になるのかを考えることが公民的資質の第一歩だと考える。

単元の導入でKWLシートを使うことで見通しをもつことができた。教科横断的に扱っているのが良かった。シートを使うことで個人の意見が残るのが良かった。個人だけで調べるのには限界がある。なんらかのグルーピングをしなければならない。調べるテーマによって、資料の量が違う。事前に教師がどのような資料があるのかを調べておくと良い。子どもの調べたいことに合わせて教師が提示してあげる。資料同士のつながりを意識させることも考えられる。

概要報告

実施期日	7月29日(月)【午前】
部会名	小学校 算数部会

テーマ

『数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動の充実を目指して』
～他者の考えから、思考・表現を深めていく学び方～

提案概要

第3学年 分数

新学習指導要領算数編では、「数学的な見方・考え方」として「事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、根拠を元に道すじを立てて考え、統合的・発展的に考えること」と明示して、数学的活動の充実を掲げている。本研究では、思考力・表現力の育成に焦点を当て、数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動の充実を目指した。

本研究は、図1に示すように、数学的な見方・考え方を軸とした数字や文字・表やグラフなどのネットワーク化を図る授業デザインを構想した。具体的には、課題解決の際、数の表現や文字での説明、図や具体物を使った表現が、数学的な見方・考え方を軸に関連付けられていくことで、数学的活動が充実するとともに深い理解に至ると考えたのである。

このネットワーク化は、他者との対話を通して構築されると想定し、対話を通して個々の表現が相互作用的に結びつき、クラス全体での合意形成がなされることで、他者の考えから思考力・表現力が育成されると捉えた。そこで、上述した授業デザインを意図した授業を実践し、実践の分析を通してその有用性を検証した。

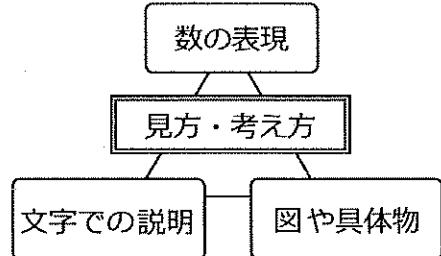


図1 見方・考え方によるネットワーク化

本单元では、分数を「単位分数の幾つ分」という見方・考え方を働かせ、問題解決の過程や結果について、数の表現、図や具体物、言葉での説明を用いて思考・表現し、対話を通して伝え合う数学的活動を設定した。そして、図1に示すように見方・考え方を軸としたネットワーク化を図り、個々の児童が他者の考えを受け入れながら思考・表現を深めていくことを目指した。

【成果】

今回の单元では第7時で計算の仕方を「単位分数の幾つ分」という見方・考え方を働かせて思考・表現を深めることをねらった。実際の授業では、計算の仕方を説明する中で、児童から、「なぜ $3/10$ でないのか?」という問い合わせがあり、対話が始まった。

児童は、対話の中で「との大きさ」の変化に着目しながら分数について話し合い、やがて、「との大きさ」に着目して分数を見ることにより、数の表現と言葉での説明、図や具体物での表現など、様々な表現が結び付けて、思考と表現を深めていった。その中で、「単位分数の幾つ分」という見方・考え方を働かせて考える児童も現れた。

例えば、見方・考え方を働かせず数の表現をしていた児童は、見方・考え方を働かせた言葉での説明や、図や具体物での表現を受け入れることにより、学習場面で働かせた見方・考え方が明確になり、自らの数の表現に意味付けを図っていた。

このように、他者の考えから、思考や表現を深めるために、見方・考え方を働かせてネットワーク化を図ることで、思考力・表現力が育成されることがわかった。

【課題】

今回の研究では、見方・考え方が数学の世界で生かされていたものの、日常生活においてどのように活用されているのかが検証できなかった。平成30年度全国学力・学習状況調査小学校算数の結果から、日常生活の事象を、数量を関係付け、根拠を明確にして記述することに課題があるとの指摘があった。この課題に対して、見方・考え方を軸としたネットワーク化を生活場面に拡張することによって解決の糸口になると考える。

質疑応答

- ・分数の指導を行う上で、「元の大きさ」をどのように捉えさせたのか。
→単元の導入部で、 $1/2$ と $1/4$ の長さ比べを行った。児童は $1/2$ の方が長いと予想するが、実物のテープは、一方が40cmの $1/2$ 、もう一方が1mの $1/4$ であり、「元が違うと比べられない」と、児童が考えるきっかけとなつた。この「元の大きさ」が単位量当たりの大きさを考える学習でも役に立つと考える。
- ・ $1/5 + 2/5$ の式から入ることで議論ができた。
→この式のやり方について、初めは「分子だけ計算すればよいのだ。」というようなマニュアルとしての説明があった。しかしこの説明では見方・考え方を働いているとは言えず、算数が不得意な児童への説明としては不十分であった。その後、言葉による説明や、図や具体物による説明が互いに結びつく中で、「単位分数の幾つ分」という見方・考え方を働かせながら思考・表現を深めることができた。
- ・数や言葉、具体物で多くの考えが共有されていた。
→具体物で分かりやすく感じる児童も多いが、どこでわかるかは児童それぞれ違う。見方・考え方を中心に置き、それぞれの考えをネットワークのように結び付けることで理解が深まると考える。
- ・算数が不得意な児童が「わからない」ことを表出し、その後の様々な意見が出されていた。互いに受け止め、認め合える学級風土を感じた。
- ・見方・考え方方が児童の中で働くと、意見の共有に役立つ。
→これまで通り授業づくりを行いながら、教科や内容の見方・考え方を、先生たちが意識して授業を行うことが大切だと考える。

まとめ概要

- ・分数が苦手で、分数の意味が定着していないことが、中学校でも見受けられる。初めて分数に出会う際に、見方・考え方をしっかりと働かせて学習することが大切。
- ・児童がつまずくところを共有し、見方・考え方を働かせながらたくさんの意見を結びつけることで互いの理解を深めていた。
- ・児童の様々なつぶやきを丁寧にキャッチし、授業を構成していた。
- ・分かったことを自分の言葉でまとめるなどすると、表現力を育むことにつながる。

概要報告

実施期日	7月29日(月)【午前】
部会名	小学校 理科部会

【テーマ】

『主体的・対話的で深い学びを促す指導の工夫』

【提案概要】

【テーマについて】

これからの中学校時代に、主体的・対話的で深い学びは、学校教育の根幹になるのではないかと考える。知識を教えるだけの授業は教師に代わってAIが行うことになるであろう。学校では、AIやアプリではできない授業、つまり対話をしながら学んでいく授業を展開する必要がある。

「深い学び」は、地域の方と関わることでその場を作ることができ、子どもが教師と話すだけでも深い学びになる。より対話的で深い学びの場を作るには、子どもたち同士の関わりが大切であり、そこからは主体性も生まれる。今回はジグソー法を取り入れ、主体的・対話的で深い学びを促す指導の実践を行った。

【ジグソー法について】

アメリカの心理学者エリオット・アロンソンにより提唱された学習方法。10のステップがあり、学習者同士の協力や教え合いを促進する。グループメンバー全員に役割を与え、責任感を涵養させ、共同で作業をする場を構築する。

【実践の概要】 小学校6年生「水溶液の性質」

- 7種類ある無色透明の水溶液を判別するためにはどんな実験をしたらよいか考え、各グループ内で実験の役割分担を行った。
- ルールは「一人が一つの水溶液に対して一つの実験を行う。」4人グループなら4つの実験しかできない。
- 課題づくりのポイントは、ルールはシンプルにすること。また問1を簡単にしておくこともモチベーションを上げるために大切なことである。今回は、水溶液の一つから泡が出ているので、炭酸水と想像がつくようにした。ある水溶液については「加熱不可」と伝えることで、子どもたちはこれまでの知識から推測することができた。
- 各々が実験を行った後はグループにもどり、お互いの実験結果を伝え合った。責任を持って結果を伝え、また友だちからの報告にもしっかりと耳をかたむけることで、グループ内で必然的に会話が生まれていた。特別な仲間づくりの時間を設けなくても、このような仕掛けで普段関わりが少ない児童同士でも自然な会話をすることができるようになる。

【成果と課題】

- 追加実験の申請など、課題解決のために、児童が自ら考えることができた。
- ホワイトボードを使ったので分かりやすい発表を行うことができた。発表を準備する段階で、個々の学びを一段と深めることができた。
- 話し合いを行ったことで、今までの授業と比べても、児童の水溶液への興味が高まり、身の回りにある水溶液に目を向けるようになった。
- 話し合いの中で話題となったことをよく覚えており、学習の定着が見られた。
- ジグソー法で割り当てられた役割（実験）をしっかりと果たすことで責任感や一人一人が大切なのだという一体感も涵養された。
- 単元の最後に行なった食塩水と水の判別方法については、ほとんどの児童が考えることができた。また「重い方がきけん」と書いた子は、「水の中に何かが入っていると重くなる。見た目は水でもただの水ではないから飲ま

ない方がよい。」と考えたようであり、授業だけに留まらず、実生活の中でのこととして考えを広げることができたようだった。

- ・小中学校の系統については「中学校での新しい友達とも話せるようにしたい。」「みんなで話し合うことで、友達関係が深まった。」という感想があるように、話合いを通じて対人関係を構築できるという確信が個々の児童に芽生えた。
- ・どの教科、どの単元にもジグソー法が活用できるように、これから実践を重ねていく必要がある。
- ・ジグソー法をそのまま取り入れるのではなく、児童の実態に応じて活用していく方法を研究し、さらに深い学びができるしきけを考えていく必要がある。

質疑応答

- ・最後の問題で「重さ」が出たということですが、その前の実験では子どもたちから「重さを量る」は出たか。

⇒クラスによっては出てきた。実験方法について出てきた意見は、クラスそれぞれでしたので、例えば「冷やす」が出てこないクラスもあった。

- ・「主体的・対話的で深い学び」が新学習指導要領で重要視される中で、「対話的」が比較的見えやすい活動なので、多くの実践で取り組まれているように感じる。今回のジグソー法もそうだが、学びの手法部分に重きを置きすぎて、教科の学びにつながっているのだろうかと疑問を持つ。普通は水溶液に対してソートをかけて判断し実験を進めていく。しかし今回は活動を分断し限定的に実験を行っている。また「加熱してはだめ」との教師からの指示で水溶液を判断することは、直接観察していないのに見通しをもてているのだろうか、と思った。

対話にひっぱられて教科の学びが見落とされがちとも思うが、どのようにお考えか。

⇒この授業の目的があるので、自然を見て気付くことは別の授業で行う。対話については、先生が一方的に話すよりも子どもたちが話し合った方がよく覚えているし、関心意欲が高まり、理解も深まる。

- ・理科の目標の「自然に親しむ」「見通しを持って取り組む」ことを考えると、このジグソー法の分断化は適さないのではとも思った。小学校理科は生活に基づいているので、それぞれの現象自分で見て、そこから学びとするもの。今回の実験での、自分の見ていなくても他の人が言っていたから判断する、ということは私としては違和感があった。

⇒すべての理科でこのように区切っているわけではない。また今回の実験は、分担をしているのであって、子どもたちの流れる発想を切っているわけではない。ジグソー法は分断ではなくセグメントに分ける。つまり分担をしているということ。一人一人が責任を持って分担された実験を行い、得た情報をグループで責任を持って話す、ということである。

まとめ概要

- ・理科は各学年の目標があり、多くのことを並行して行う必要がある。全時間にすべてを行うのではなく、各単元でポイントをしづり、年間で位置づけることが重要になる。指導計画については、子どもの実態や地域との関わりも考慮し各学校で適切なカリキュラムマネジメントを行うことが大切である。
- ・水溶液の判別実験は樹形図的に行うこともあるが、今回は「対話的」を重点においていたので、この手法が適当であった。子どもたちは、解決していく楽しみや喜びを経験できた。
- ・提案された「ジグソー法」はそれだけでは深まりを得ることはできない。実験をする前の確認や話し合いのルールの提示など足場かけが不可欠である。万能な手法というものはなく、それをどのように活用していくかが大切である。

概要報告

実施期日	7月29日(月)【午前】
部会名	小学校・生活部会

テーマ

『一人一人の気付きの質を深め、自己肯定感を高める生活科授業』

提案概要

単元名 『ぼくらはみんな生きている』第一学年

- 単元目標
- 様々な感覚を研ぎ澄ませ、体全体を使って身近な自然と触れ合うことで、その様子や特徴に気付くことができる。
 - 自分自身の成長や友だちのよさに気付くことができる。

現行学習指導要領及び平成29年度神奈川県小学校教育課程研究会研究主題とのかかわり

【学習指導要領】

第2章 第5節 生活 第2 各学年の目標

- (3) 自分自身を見つめることを通して、自分の生活や成長、身近な人々の支えについて考えることができ、自分のよさや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活するようとする。

【研究主題】

- ②一人ひとりの児童自身の気付きの質を高め、活動や体験を一層充実するための授業展開の工夫・改善

新学習指導要領との関連（内容項目）

第2章 第5節 生活 第2 各学年の内容

- (5) 身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなど活動を通して、それらの違いや特徴を見付けることができ、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わることに気付くとともに、それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする。
- (6) 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができ、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。
- (8) 自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んだりすることができ、身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かるとともに、進んで触れ合い交流しようとする。

提案内容

【実践に向けての課題意識と提案者の思い】

第一学年のアサガオの観察では、どのように観察すればよいかわからない児童が多くいる。視覚に頼った観察だけでなく五感を頼りに観察することを指導するが、児童は五感で感じたことをどう表現すればよいかがわからない。また近年、幼児期までの遊びの経験が少なくなっているせいか、生活科の時間のどろだんご作りも満足にできない児童が多くなってきていている。提案者は、そういった一年生児童の経験不足の実態や身近で手軽な対象が少なくなってしまった現代の環境要因を踏まえ、五感を十分に使った体験が必要だと考えた。視覚だけでなく、聴覚・触覚・嗅覚のそれぞれの感覚において「一人一人の気付き」を大切にした授業デザインを行った。また一年生という発達段階も踏まえ、話す・書く・絵で表すなどの様々な表現方法にも留意した実践を提案した。

【主な学習活動】

第一次 静かに3分間耳を澄ませ、耳にした音を絵で表す「耳をすませば おとっペタイム」

第二次 アイマスクをつけて目の前の対象を触った感覚を言葉で伝え合う「心ゆさぶる 手のひらセンサー」

第三次 いくつもの種類の香りを嗅いで、特徴を伝え合う「鼻とハートは とってもなかよし」

第四次 今までの感覚を整理し自分図鑑にまとめる「7歳の自分をみつめて」

本実践では「日々視覚に頼ったものの見方をしている児童に、五感を十分に活用する経験をさせ、感じたことを自分の感性のままに、自信を持って発信できるようにさせたい」という提案者の思いがある。それらが達成できるような学習の場を上記のように設定し、実践発表を行った。

【成果と課題】

この単元を通して、児童は躊躇なく自分を表現するようになった。感覚をどう表現すればよいか悩んでいた児童も、学習を進めるにつれ「自分の感じたまま表現していいんだ!」と感じるようになってしまった。言語表現に限らない「表現することの楽しさ」を体感している様子がたくさん見られた。この生活科の時間を心待ちにしている児童も多くいた。

また本実践を通して、「表現のしやすさ」も気付きの質を深めることにつながったと考える。「表現しやすい」という要素は、同時に「理解しやすい」「分かりやすい」ということにもつながる。自分の思いを客観視しやすく、また、合わせて他者の思いも捉えやすい。目標としていた「身の回りの対象の様子や特徴に対する気付き」を深め、「自分のよさ、友だちのよさに対する気付き」の向上につながったと感じる。

課題は、簡単な言葉や絵で表現できていることを今後どう発展的に言語活動につなげていくかだと考える。生活科だけでなく、国語の時間など教科横断的に学習する場を確保していきたい。自分の思いをスムーズに表現できるように、より多くの表現方法や語彙の獲得を目指し、発達段階に応じた学習計画を模索していきたい。

【研究会参加者の体験活動の様子】

本提案の中では、実際に研究会参加者にも児童と同じ体験をしてもらうため、第二次「心ゆさぶる 手のひらセンター」を行った。アイマスクをした状態でたらいの中の氷を触り、感じたことを伝え合った。さらに体験活動のあとにはそのグループで協議を行った。協議の柱は以下の二つである。

- ① (子どもの気持ちになって)子どもだったらどう表現するか。どう表現すれば伝わるか。
- ② (教師の立場に立って)一人一人の活動の気付きをどのようにすれば向上させられるか。引き出せるか。

各グループから出た意見としては①は「触る人を順番にして互いに話を聞く」「音で表現する」「劇化・動作化する」「絵に表す」「○○みたいと例える」「表情で表現する」「遊びで表現する」という方法が出た。②は「褒める」「ブラックボックスの使用」「教師が手本を示し過ぎないようにする」「子ども同士の仲のよさ」など、場づくりや教材との出会い方の工夫、教師の発問、教師の意図した児童交流などに関する意見が出た。

質疑応答

Q: この活動で、子どもの感覚が一番広がった瞬間はどんな時だったか。

A: 「耳をすませば おとづペタイム」では、回を重ねる度に児童が感覚を研ぎ澄ませていき、全員が静かに音を聴き、表現する際に一気に絵で表す姿が見られた。児童が自己解放する瞬間だった。

Q: 教師として、どのような意識をもって関わっていけばよいのか。

A: アサガオの観察の授業で「よく見て」だけでは深まらない。五感の活用の仕方を極めていく。五感を活かした観察方法は、中学年、高学年の理科学習へとつながるはずである。

まとめ概要

提案者は、五感を十分に生かした本実践は、生活科だけでなく今後すべての学習の基盤になるとを考えている。

- ・体験的な学習であったこと
- ・児童の抱えている課題を教師が見取り、それを解決するためにデザインされた授業であったこと
- ・情報があふれる現代社会の中で、あえて五感の一つの感覚に目を向けた実践であったこと
- ・遊びの中で「学ぶ」幼児教育との関連性が見られたこと
- ・各教科との関連性が見え、言語活動が充実していたこと
- ・場作り、十分な時間の確保、多様な表現方法など、児童が安心して活動ができる工夫が見られ、自己肯定感の獲得につながっていたこと

以上が、本実践の特徴だと価値づけてもらった。また、幼稚園教育からの円滑な引き継ぎについては、今後さらに求められるだろうという話もあった。

概要報告

実施期日	7月29日(月)【午前】
部会名	小学校 音楽部会

テーマ

『音を通して他者に関心をもち、「聴くこと」を大切にする』

提案概要

本校の低学年児童には、音楽の授業において「聴くこと」と「表現すること」の活動を分けることに課題が見られた。「聴くこと」は、音色、リズム、拍の流れ、フレーズなどの音楽を特徴付けている要素を取り入れることで自らの音楽的な経験にしたり、楽曲の気分を感じ取ったりすることにつながると考えている。そこで、カリキュラム・マネジメントの視点を入れた「音楽づくり」の取組において、音を通して他者に関心をもたせ、音楽の授業から児童が「聴くこと」への必然性を感じられるような実践を目指した。

【実践の概要】（2年生 30名）

ねらい：身の回りの音に興味を持ち、楽曲のイメージに合う音をつくったり、拍の流れに合わせて自らつくった楽器を演奏したりする。

学習指導計画

- | | |
|--------|--|
| 1・2時 | 「虫のこえ」を歌う（虫の鳴き声をCDで聴き、楽曲中の虫の鳴き声の歌い方を工夫する。「ああ おもしろい」の歌い方を工夫する。） |
| 2・3時 | 音づくりをする（楽器の音の鳴らし方を確認、身の回りのものの音の鳴り方を探る。） |
| 図工1・2時 | 虫の形をした楽器（以下 楽器の虫）をつくる |
| 4時 | つくった楽器の虫に名前をつけ、「虫のこえ」の曲の「あれ〇〇〇〇が ないている」の2拍分に考えた名前を当てはめる。（例：シャカむし、かさかさむし） |
| 国語0・5時 | 画用紙にネームペンで大きく見やすいように考えた虫の名前を書く |
| 5～7時 | 「虫のこえ」に合わせて演奏する音色とリズムを考えて発表をする（①発表児童の説明 ②「あれ〇〇〇〇が ないている」を全員で歌う ③続きの虫の鳴き声部分2小節分を発表児童が演奏 ④「ああ おもしろい 虫のこえ」を全員で歌う） |

【成果】

- ・児童が楽しみながら愛着をもってつくりたので、楽器の虫を大切に扱っている様子が見られた。
- ・楽器の虫から出る小さな音にも、耳をそばだてて聴く姿が見られた。
- ・発表を真剣に聴く様子から、音を通して他者に興味をもてたと考えられる。

【課題】

- ・ふりかえりをインタビュー形式で行ったが、文章でふりかえりができるとよかったです。
- ・級外という立場だったので、楽器の虫をつくる図画工作科の授業の様子を見られなかつた。

質疑応答

- ・「聴くこと」を大切にとあるが、この取り組みは鑑賞ではなく、音楽づくりでよいのか。
→児童に身に付けさせたいのは、評価基準にもある通り。鑑賞については、授業を通してその背景にあるものも同時に高めていった。評価自体は音楽づくり。
- ・リズム、強弱などは意識していたか。
→拍の中で、との指導としたが、工夫する児童も見られた。

グループ協議

- ・リズムを聴くという難しいことを、音符ではなく○○○○に当てはめるのが低学年には合っていた。
- ・提案で触れられているリズム遊びについて詳しく知りたい。
- ・楽器の虫づくりの段階でも音への工夫があつたはず。評価できるとよかったです。
- ・一人ずつの発表を飽きずに聴いていたか。また、評価について、どのような児童がAになるのか。
→3時間、集中して聴いていた。ただ聴くのではなく、参加型だったのがよかったです。評価については、強弱や休符など工夫できていた児童がAに該当するとした。
- ・やることが明確で、自信のない児童も取り組める工夫がなされていた。
- ・教科横断の仕方が参考になった。
- ・表現と聴くことが混ざることが課題とされていたが、授業後に変化はあったか。
→少しずつ良くなっていった。経験として聴くことの楽しさが分かったのは大きい。
- ・リズムが単調な印象。○○○○に縛られたのでは。□にするともっと多様になった。
- ・支援級でも取り組みたい。まねっこリズムを取り入れている。虫に興味のある児童によい題材。
- ・「聴く」という目標が達成されていた。
- ・リズムより拍の流れを意識するのも大切ではないか。
→名前を考えることを先にした。拍の流れよりつくりやすさを優先した。
- ・虫の鳴き声をはじめに聴いておいたことが、後で生きている。
- ・担任との連携は大変だと思うが、児童が意欲的になった。
- ・A表現（3）のアは達成できている。イの「音を音楽に」はできたか。

まとめ概要

- ・「虫のこえ」は、まねっこや虫が好きという低学年に合った題材であり、低学年のうちにやっておきたいことがつまっている。
- ・虫の鳴き声にも音色、強弱、リズムがある。身の回りの音に音楽的要素がある。
- ・実践上の工夫を、それぞれが考えて実践できる題材。どんな音がいいか考えてから、虫をつくる活動をしててもよい。
- ・2年生に合ったリズムでよいが、三連符などは学年が上がって出てきたときに振り返って指導に使える。
- ・拍、強弱、音色など、一つでも思いをもってこだわると、音楽的に高まる。

概要報告

実施期日	7月29日(月)【午前】
部会名	小学校 図画工作部会

テーマ

『学びに向かう人間性～互いのよさを感じ取って認め合う～』

提案概要

○題材名と学年 『ゆめのまち さんちょうめ』 第1学年

○実践に向けての課題意識

本学級には、図画工作に対して興味・関心が高く、意欲的に学習に取り組む児童が多い。しかしその一方で、自分の作品になかなか自信が持てず、見せ合いをする際に恥ずかしがってしまうことをよく目にする。そこで、本題材に取り組むにあたって、鑑賞の時間を意図的に多く設け、造形的な見方・考え方を養いながら、友達の良いところを探したり、それを全体で共有したりすることで、自信を持って取り組み、友達の良い所を参考に発想を広げられるようにしたいと考えた。

また、共同作品に関しては、前題材で、班で何をつくっていくかアイディアを出し合う活動までは行えたものの、創作活動では、個別で黙々と作業する児童が多くなった。そこで、本題材では、班で何をつくるか付せんで示して作るもの整理させたり、役割分担の時間を設けたりして、協力して作品制作に取り組めるようにし、友達と関わり合う力をつけさせていきたいと考えた。

○指導方法の工夫

- ・前題材の「どうぶつむらのピクニック」では、箱の切り方、トイレットペーパーの切れ込みの入れ方など基本的技能を学習した。
- ・個の作品（ゆめの家）を作る過程で、作品を見せ合う時間を多く取り、友達の良い所を認め、それを参考にさらに発想が広がっていくようにした。
- ・個から共同の作品にしていくにあたり、みんなでどんなものを作っていくか、付せんを使ってアイディアを出し、班の方向性を明確にする工夫を行った。
- ・友達との関わり合いを増やすため、広い空間で作業を行った。

○評価の工夫

- ・作品のみで評価するのではなく、振り返りシートの記述もあわせて評価を行った。
- ・友達同士の関わりや児童のつぶやきから、工夫などを見とった。

質疑応答

Q. 真似されることを嫌がる子もいると思うが、真似することの良さはどのように伝えたのか。

A. 見せ合いの時間を持つ前に“良かった所と真似してみたい所を見つけよう”と子どもたちに伝えた。また、“真似されることはすごいことなんだよ！ 真似したかったらその子にどうやって作ったの、と聞いてみよう”と伝えることで、子どもたち同士の会話が増えた。

Q. 作品を鑑賞するときや、作品を友達に説明するときのルールは何かあったのか。

A. 自分で友達とたくさん話をすること、良い所と真似したい所を探すことの2つのルールを作った。まず、教師が大げさに「これいいね！」と着目してほしいポイントを話していたら、自然と子どもたちだけでもできるようになった。

Q. 見せ合いの時間には図工が上手な子に人が集まりそうだが、目立たないけど上手な子の取り上げ方は。

A. 子どもたちが注目していない子や自信がなさそうな子の所に教師が行き、作品を取り上げるようにした。

Q. 高学年の授業では人と違うことに臆病になってしまう子も多いが、今回の授業では人と違う良さをどう認め合っていたのか。独創的な作品はあったのか。あるならば、そのときの周りの反応は。

A. ビックベンを作っていた男の子に対して「ビックベンは分からぬけどなんかすごい時計だね。」という会話が

あった。発想や作り方の工夫に対する褒め合いがあり、人と違っても良いという雰囲気があった。

Q. 技術面の指導が不十分だったとあるが、具体的にはどういうことか。

A. 画用紙の立て方、3つに折って立てるとき三角形になる、トイレットペーパーに切れ込みを入れると立たせることができるというのは教えたが、モールの使い方、毛糸の使い方など、用意した材料それぞれについての使い方は教えていなかったので、そこを指導していたらもっと作品の幅が広がったのではないかと思う。

Q. 模造紙の枚数が多くなると子どもたち同士の距離が遠くなってしまう事がある。場の設定で特に工夫した点があれば。

A. どうぶつむらのピクニックでは画用紙の上にピクニックの様子を作らせたが、画用紙だと小さすぎて失敗した。今回はその反省を生かし、10人で活動するにはどのくらいの広さが良いか考え、1枚に3人の広さで取り組んだ。

まとめ概要

○低学年で「主体的・対話的で深い学び」を取り組むために

- ・少ない人数（3～4人）での話合いの時間を作り、話すことに慣れさせる。寡黙な子など、苦手な子も話をしやすい友達なら話せることもあるので、そういう場を作つてあげると良い。また、他教科でも話し合い活動を入れていくと、慣れていく。教え合いによってできる子も苦手な子もプラスになる。
- ・一対先生の関係を作つてからペア、ペア対話ができるようになつたらグループと段階を踏んでいく。話合いの形を提示してあげると話しやすくなるとの語彙が増える。
- ・真似することを肯定してあげると安心感が生まれ「主体的・対話的で深い学び」につながる。普段からの子どもたちの関係性が授業にも出るので、話しやすい雰囲気づくりが大切なのは。
- ・低学年での話合いはどこまでできればよいのか。話合いはしていないが、作品を鑑賞してやってみようかな！と思った子、これは対話的になるのか。
- ・付せんの活用法。発言はできないけど文字なら表せる子には有効なのではないか。

○苦手な子への声かけの仕方、手立て

- ・具体物を用意するのも一つの手だが、例示と似たような作品になりがちなので、たくさんのパターンを例示したり、他のクラスの作品を借りてきて提示したりすると数が多くなつて良い。
- ・友達の作品を真似しても良いが全く同じにしない。こだわりの部分を作るよう伝える。また、日常から違いを認める。みんな違つてみんないい。共同作業をやる中で得意分野を見つけ深め、自信をつけさせる。
- ・失敗を恐れる子もいるので、失敗が失敗にならない直し方を提示してあげると良い。
- ・最初はみんな同じ描き方を示してあげると、みんな同じような絵になつてしまふが、苦手な子はみんなと同じ作品ができたことで自信につながる。
- ・待つてあげるもの大切。声掛けしそうない。絶対うまくいく！などポジティブな声掛けを心がける。
- ・イメージを持てない子には視覚的な支援（写真を見せるなど）をしてあげると良い。
- ・低学年のうちは見ているだけでもいいのでは。教師側のハードルを下げる。発達段階に合わせ、子どもがやりたくなるような仕掛けづくりを心がける。

○まとめ

- ・先生自身がコミュニケーションをたくさんしている授業だった。
- ・図画工作科では、発想や構想の能力を高めるための対話を。「対話的・主体的で深い学び」とは授業改善の視点であるので、その視点を忘れずに、授業の振り返りができると良い。
- ・“見せる・見せ合う・教え合う”ことができる学級作りを。普段から“見せる・見せ合う・教え合う”ことをしていると、みんなができるようになる。

概要報告

実施期日	7月29日(月)【午前】
部会名	小学校 家庭部会

テーマ

『日常生活に生かせる力を育む家庭科教育を目指して』

提案概要

子どもたちが楽しみにしている毎日の給食を通して食の大切さを伝え、栄養教諭の助言をもとに給食の献立を考えることを通して食に対する興味をもたせたいと考えた。児童には、給食の献立において、これまでにないオリジナルの献立を作成する学習課題を設定した。課題は、児童にとって難しいと思われるが、班の仲間と協働しながら献立について深く考えることを通して栄養素や献立の組み合わせの重要性を学ばせたいと考えた。

【実践の概要】（6年生）

- ① おうちの人気が食事を作るときに気を付けていることを知る。
- ② 好きなおかずで献立を考え、3色食品・5大栄養素に分ける。栄養バランスについて知る。
- ③ 給食を参考に、栄養バランスのよい一食分の献立の立て方について理解する。
- ④ 給食は、栄養のバランスを考えて作られ、給食の献立を3色食品・5大栄養素のグループに分類されていることを知る。
- ⑤ 給食の献立を考えるときの約束を知り、料理と食材を関連付けながら、栄養のバランスのとれた給食の献立を考える。
- ⑥ 考えた献立について栄養教諭からのコメントを参考に、もう一度給食の献立を考え直す。
- ⑦ 栄養のバランスや色どりなど、給食の献立を考えるときに大切にしたポイントをまとめる。
- ⑧ 各クラスで班ごとにプレゼンテーションを行い、栄養のバランスや色どり、季節感などの視点から、クラスで1つ給食の献立を決める。
- ⑨ 6年生が考えた給食の献立が、1月と2月に実際に出ることを全校児童に伝え、6年生6クラスから選出された6つの献立の中から、全校投票で2つの献立を決める。

【成果】

- 給食の献立を考え、実際に出してもらえるという内容のため、児童にとって身近で考えやすく、意欲的に取り組むことができた。
- 学年目標に沿った授業テーマだった。（学年目標：「自立・尊重・感謝」）
- グループでの話し合いで「タンパク質」「〇〇切り」など、家庭科で学習した言葉をたくさん使っていた。
- ワークシートに調理法を記入することができ、より具体的な話合いができた。
- 困ったときは班で考えた献立テーマに立ち戻って、考えることができていた。
- 栄養教諭と一緒に取り組むことで、献立を考えるうえで出てきた疑問や悩みをすぐに解決することができた。
- グループで活動することで、様々な意見を献立に取り入れることができた。
- 初めての献立があるため、調理員さんにも分かりやすいように切り方や盛り付けなどを細かく書いていた。
- 地元の食材を使わなければならないという指導はしていないが、児童が自ら神奈川県産のものを選んでいた。
- 栄養教諭からは児童にとって少し高度な内容のコメントが書かれていたが、児童はその内容を受け止め、さらに考えを深めていた。
- 残しが少なくなるように、給食委員の児童が栄養教諭に、どのメニューが、残しが少ないのかを聞きに行き、積極的に考える姿が見られた。
- 給食場で働く調理員さんの苦労や栄養バランスの大切さを学び、給食を残す児童が減り、たくさん食べるようになった。

【課題】

- グループ活動が中心であったため、個人の評価がしづらかった。
- 気を付けなければならないポイントが多かった。しかし、そのポイントを全部守らなくてはいけないので最初に献立を考えたときは時間がかかった。
- 児童にとって、教科書に書いてある主菜と副菜の違いが分かりづらかった。そのため、普段給食ニュースで使われている言葉の主食・おかず・汁物と言い換えて授業を行った。
- 味の組み合わせについて、想像だけで簡単にやめたり変えたりすることなく、根拠をもって相手が納得するような話し合いをしてほしかった。

質疑応答

- ・ 3、4時間目の目標の「みんなが笑顔で健康になるメニューを考えよう」の笑顔とはどんな意味があるのか。
→おいしく食べられる子どもの笑顔だけでなく、調理員さんが残食なしで笑顔になることを指している。
- ・ 評価について。ワークシートでは文章にするのが困難な子の評価や、冬休みの宿題で調理をする課題のこと、それぞれの家庭状況が違うので評価できないのではないか。
→ワークシートについては、話合いの時や積極的に参加している様子を見て評価をした。家庭の差はあるが、6年生なのでそれが自分なりにやってきていて課題をしてこなかった児童はいなかつた。
- ・ 栄養教諭は学年すべての授業に入ってコメントをしていたのか。
→していた。

グループ協議での感想・意見

- ・センター給食のところもあるので今みたいな取組ができるか。他の学校では家庭科の授業ではなく、委員会の取組で行っているところもある。
- ・時間をかけてていねいに授業をしている。給食はかなり制約があるので、実際にやってみた時には、児童が考えた献立と違う物になったことがある。
- ・地域によってはセンター給食になってきているが、センターから自校給食になっているところもあると聞いている。
- ・5年生のキャンプのバイキングの前に授業をして「バランスよく食事をとろうね。」ということもできる。

まとめ概要

- ・よく考え、子どもたちがわくわくするような授業を計画している。
- ・評価については、ワークシートにたくさん書いたものがあるのでそれを使って評価することができる。評価計画にどんな場面でどんな評価をするとよいのか分かるようにA基準やCへの手立てを載せる等、より明確にするとよい。
- ・中学校の家庭科の授業は6つの食品群と量を考えて一食分の献立作りをする。小学校では、5つの食品群のバランスを考えるくらいに留めてもよかったです。
- ・小中連携の面でもどんな学習内容なのか知っておくとよい。
- ・これから的生活につながっていく授業計画だった。

概要報告

実施期日	7月29日(月)【午前】
部会名	小学校 体育部会

テーマ

『全員が参加できるバスケットボールを目指して』 ～ボールを持たないときの動きの習得～

提案概要

単元・領域等

ボール運動（ゴール型）バスケットボール 第6学年

学習指導要領との関連

E ボール運動

ボール運動について、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

- (1) 次の運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、その技能を身に付け、簡易化されたゲームをすること。
ア ゴール型では、ボール操作とボールを持たないときの動きによって、簡易化されたゲームをすること。
- (2) ルールを工夫したり、自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだりするとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。
- (3) 運動に積極的に取り組み、ルールを守り助け合って運動をしたり、勝敗を受け入れたり、仲間の考え方や取組を認めたり、場や用具の安全に気を配ったりすること。バスケットボールに全員が参加できるようになるために、次の2点を柱として授業実践を行った。1点目が「簡易化されたゲーム」で、苦手意識のある児童も参加しやすくなるようなルールの設定（4対3のアウトナンバーゲーム、保持しているボールを奪うことの禁止、ドリブルは3回まで）を行った。2点目が「ボールを持たない時の動き」を身に付けるを中心とした実践を行った。特に各時間のめあてに沿った「発問の系列」を作成し、ICTと学習カードを活用して、児童が自分たちの動きを客観的にとらえ、それをもとに話し合う場を設定した。具体的なICTの活用方法として、前時のチーム練習やメインゲームの様子を録画した映像を教室で見せながら「発問」を投げかけ、考えさせた。そこでは、ゲーム中のどの場面とボールを持たない時の動きがつながっているのかを視覚的に理解させた。学習カードについては、本時のポイントを児童が意識しやすいように、毎時間の振り返りを「キーワード」とともに記録させた。これらの指導方法の工夫は、評価の工夫にもつながり、児童が実際に活動している体育の時間だけでは評価しきれない技能や思考力をゲームの映像や学習カードから見取ることにつながったと考える。

質疑応答

- ① 単元計画の中で、7時間目から、簡易化されたゲーム（アウトナンバーゲーム）ではなく4対4のゲームが入っているのはなぜか。
→ 中学校に向けて、実戦に近いものにしたいという思いから4対4のゲームとした。
- ② コートは何面用意し、1チームの人数は何人で行ったか。また、アウトナンバーゲーム時の待っている児童は何をしていたのか。
→ 2コート（全6チーム）1チーム6～7人、うち3人がコート内+1名が攻撃時にコートへ（順番に入る）
- ③ 授業中の運動量を確保するために、どのような工夫していたのか？
→ 話合いの時間と活動の時間を分けることで運動量を確保していた。具体的には、話合いはモジュールの時間を活用し、授業を活動の時間としていた。目安として1時間あたり20分の活動を目指していたが、実際は30分ほど活動した。

まとめ概要

今回の提案では「簡易化されたゲーム」と「ボールを持たない時の動き」についての実践だったが、ボールを持たない児童が主人公で、その児童がいかに活躍するかを考えていくことが体育であり、教師が目指していくべき姿であると考える。また「その種目の楽しさをいかに味わわせるか」を追求し、児童自ら課題を挙げたり作戦を立てたりすることのできる授業を目指していく。これらを踏まえ、動きの確認等でICTを活用していくことが求められていいくが、失敗例等を取り上げる際は細心の注意を払った上で取り扱っていく必要がある。大切なことは「100%安心感

のある授業を作る」ということである。

概要報告

実施期日	7月29日(月)【午前】
部会名	小学校 道徳部会

テーマ

『自己を見つめる道徳の授業』

提案概要

これまでに取り組んできた道徳の授業を振り返ってみると、深まりの少ない授業ばかりだった。

- ・心情理解に終始して、国語のようになってしまう。
- ・きれい事で終わってしまう。
- ・自己中心的な考えで終わってしまい、道徳的諸価値の深まりにつながらない。
- ・授業の前後で変容が見られない。
- ・自分事として考えるとは、どういうことなのか。

など、たくさん反省点が浮かび上がってきた。道徳の授業を通して、自己を見つめ、これまでの自分を振り返ったり、これからの生き方について考えたりする授業にしたいと考え、テーマを設定した。

【 テーマに迫るために 】

児童一人一人が自己を見つめ、自分事として考え、道徳的諸価値への理解を深めるために、「正直、誠実」に関わる内容項目について、3つの場面を意識して授業を組み立てた。

- ① 問題解決的な場面
- ② 自我関与する場面
- ③ 多面的・多角的に考える場面

【 授業を組み立てるための手立て 】

問題解決的な場面、自我関与する場面、多面的・多角的に考える場面を意識できるように、次の2点に取り組んだ。

① 思考ツール

多面的・多角的に考えられるようにした。教材の主人公がどのようなことで悩んでいるのかを、座標軸チャートで考えさせるようにした。横軸に正直に「言う」「言わない」、縦軸に「よい」「悪い」と設定し、正直でいることの価値理解や、ごまかしたくなってしまう人間の弱さを認識する人間理解につなげていこうと考えた。

② 役割演技

問題解決的な学習や自我関与しながら考えられるようにした。「主人公が正直に言うとしたら、どのように話したらよいか」を考え、役割演技で実際に話す場面を設定した。正直に話すことの難しさや言った後の気持ち、言われたときの気持ちなどに気づかせたいと考えた。

【 成果 】

教材文を基にして考えさせる場面で、座標軸チャートに整理したことで、様々な場面や状況を考えることにつながった。視覚的にも整理され、共有しやすかった。役割演技では、正直に話すことの良さや難しさを体験し、誠実にいることの良さについての考えを深めていた。実際の授業では、正直に話した後の様子を見て、「丸く收まりすぎだよ」「現実はそんなに上手くいかない」など、現実とのギャップを感じる児童が多くいた。頭で分かっている正しいことと、実際の難しさを見つめ、考えることが出来たのは役割演技の成果であった。

【 課題 】

座標軸チャートに出てきた意見を基に話し合う場面では、「みんなはどっちでいい？」と発問するなど、誘導的になってしまった。出てきた意見を基に、道徳的価値の理解に迫るための発問をすべきだった。また役割演技をしたことで、自分事として振り返るきっかけにはなったが、想定していたような疑似体験にはならなかった。児童への投げかけ方や役割演技への取り組み方は今後の課題である。

質疑応答

Q. 思考ツールで、座標軸チャートを選択した際に、「よいこと」「悪いこと」と設定すると、悪いことの方に児童が流れてしまう危険性や心配がある。児童が流れてしまわないように、どのような対応を考えたか。

A. 座標軸を設定する際に、「よいこと」「悪いこと」という言葉にするか悩んだ結果、シンプルな言葉で投げかけることにした。「悪いこと」を設定することで、「だまつたままでいいよね」と、悪い方に流れてしまうことは想定しなかった。「正直に言いたい気持ちはあるけど、でもやっぱり…」と葛藤する材料にできたらと考えた。

Q. 今回の授業で、児童をどのように評価するか。

A. 道徳の授業の感想・振り返りはノートに書かせるようにしている。1年間で書かせた道徳のノートに目を通して、内容項目に関わる教材の内容の中だけの考えにとどまっているものが、学年の前半の時期には多かった。それが、今回の授業を含めて後半の時期になってくると、今までの自分の経験も踏まえながら考えられるようになってきていた。児童の成長を大くくりに見取ることにつながった。

研究協議概要

【 協議の柱 】

児童が、道徳の授業を通して自己を見つめ、自分事として考えるために「提案テーマである3つの場面で、どのような取組が考えられるか」について

【 協議で話題に上がったこと 】

<問題解決的な場面>

- ・座標軸チャートを通して、自我関与しながら考えるだけでなく、座標軸チャートに出てきた意見を基に教材の他の人物の心の動きにも着目できると道徳的価値についての考えの深まりにつながる。
- ・役割演技には、自分事として考えさせられる良さもあるが、恥ずかしさから、児童がふざけてしまうこともある。役割演技の前に、自分の意見をしっかりと考え方で、疑似体験につながる。

<自我関与する場面>

- ・自分の意見を基に役割演技をさせることで自分事として考え、本音で考えることにつながる。
- ・役割演技に繰り返し取り組み児童が慣れてくることで、感情移入や共感的に考えることにつながり、より道徳的価値に迫っていくことができる。
- ・役割演技を教材のどの場面で行わせるかによって、より現実に近い場面で児童に考えさせることにつながり、自分事として考えることになるのではないか。

<多面的・多角的に考える場面>

- ・座標軸チャートの良さは、自分の考えを客観的に見ることができる所にある。立場を変えながら考えることで、気持ちの変化を視覚的に捉えやすくなる。役割演技は、自分事と考えるだけでなく、他者の様子を見るなどで新しい道徳的価値に気づくことにもつながる。

・児童から出た意見を基に座標軸を決められるとよい。言える、言えないという横軸だけでも良かった。

<その他の話題>

- ・思考ツールを使ってグループで取り組むことで、道徳的諸価値について議論する必然性につながった。思考ツールには様々なものがあるから、教材に応じて児童が考えやすくなるものを、目的に合わせて工夫できるとよい。

まとめ概要

- ・1つの手法でも授業はできたと思うが、座標軸チャートと役割演技の2つを使い、児童の思考を深めていた。
- ・教科書では、今回の教材の最後の場面は、他者からの問い合わせに対して何も言わずに終わっている。正直に言う、言わないという視点だけでなく、どうして何も言っていないのかという視点から考えることで、違う道徳的価値が見えてくる。正直に言うことですっきりするのは自分だけかもしれない。正直に話すことで、相手はどんな気持ちになるかを考えさせると、さらに深い考えにつながるのではないだろうか。
- ・児童が、将来同じような場面に出くわしたときに「こうしたらよかったです」と、思い出すことができたときに、道徳の授業が生きていくことになる。

概要報告

実施期日	7月29日(月)【午前】
部会名	小学校 外国語活動部会

テーマ

『外国語活動での成功体験を育むための手立て』

提案概要

2020年度から、中学年で外国語活動(年間35時間)が、高学年で外国語科(年間70時間)が実施となる。次期学習指導要領では、外国語活動の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次の通り育成することを目指す。」外国語の目標は「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次の通り育成することを目指す。」とある。「コミュニケーションを図る素地・基礎」を育成するためには、「英語でコミュニケーションを取ることが楽しい」と思える気持ちを育むことが重要である。授業計画には、児童が「英語で聞くこと・話すことができた」という成功体験を感じることができる場面を多く設定した。年間を通じた児童の成功体験の積み重ねが、英語でのコミュニケーションの素地を育み、外国語へのコミュニケーションを図る基礎づくりや中学校での英語学習にもつながると考え、以下の点を意識して実践を行った。

① 児童の目的意識と成功体験を育む

歌やゲーム、クイズを取り入れ、どの児童も活動を通して、楽しく自然に文字に慣れ親しむことができるようとした。表面的な楽しさだけでなく、内容的にもやりがいがあり、力がついているということを実感させるために、「友達のために文房具セットを作り紹介する。(発表)」という具体的な到達目標を示し、目的意識を児童にもたせながら活動を設定した。児童の身に付けた力を表現する場を設け、「英語で自分の思いを伝えることができた!」という成功体験をさせることができ、「これからも外国語活動・外国語の学習に進んで取り組みたい」という気持ちを育むと考えた。

② コミュニケーションの必然性

児童が必然性をもって英語を使う手立てとして、児童一人一人が好きな文房具セットを作り、自分の作ったセットと同じセットを作った友達を探す活動を行った。「お店屋さんごっこ」で、友達のために文房具を集める活動では、コミュニケーションを取る相手が自分と同じ文房具を持っているか、持っていないかが分からない状況(インフォメーションギャップ)を生み出すことで、児童が必然性をもって英語を使い、コミュニケーションを取ることができると思った。

③ FLTとのチーム・ティーチング

FLTとのチームティーチング(TT)で授業を進めていくことにより、児童の音声への興味関心を高めた。FLTとの授業の打ち合わせには、FLT向けの指導案やシナリオを用意し、TTの授業を円滑に進めることができるようにした。また、授業後にはFLTに授業の振り返り(良かったところ・直したほうがよいところ・TTをして難しかったところ・全体の感想)をしてもらうことで、授業の改善を図りながら、FLTと協力してTTを進めた。

質疑応答

Q. 授業の中で、新出英語は日本語で補足しないとあったが、実際は英語だけで説明するのは難しい。どのように説明すればよいのか。

A. 児童が知っている平易な言葉で伝えたり、実演して表現したりするなどの工夫をすると伝わりやすい。

Q. クラスでは、英語を習っている児童と、習っていない児童との間に差がある。どのように対応しているのか。

A. みんなが楽しめる活動内容を取り入れている。上手な児童には、発音の見本を聴かせたり、教えたりする場を設けている。また、聴き取れなかったり、意味が分からなかったりする児童には、個別に対応したり、できているところを積極的に褒めたりしている。

Q. F L Tとの打ち合わせの時間がなかなか取れていないが、どのように時間を取りっているか。

A. 授業前に台本を英訳して渡すことで、打ち合わせ時間を短縮したり、自分で学習の流れを把握してもらったりしている。また、授業後にF L Tの先生と振り返りを行うことで、よかった点や改善点を次の授業に生かしている。

研究協議

○担任が前向きに取り組めるための授業について

教師が自信をもち、楽しんで行うことで、児童も参加しやすくなる。児童と一緒に楽しむ気持ちが大事。一緒に歌ったり、踊ったりする活動を取り入れると楽しみやすい。また、教師が好きなことを英語で伝えたり、好きなフレーズを使ったりすることも大切である。英語を話すことが苦手な場合には、自分ができる範囲の英語を使うことを心がけ、言葉にできない英語は、絵・写真・動画など視覚化できるものを利用するとよい。

○子どもたちの成功体験を育むための取組について

子どもたちの授業に取り組む意欲には差がある。外国語を学ぶ意義をしっかりと伝え、できる、できないではなく、間違ってもよいからトライすることの大切さを理解させることが重要である。

成功体験を育むためには、クラスの全ての児童が、楽しんで取り組める活動を取り入れることが大切である。活動に、歌やダンス・ゲーム・カード・絵本等が挙げられるが、児童が興味のある活動を積極的に取り入れるように心掛けた。しかし、クラスや児童の実態に応じて学習方法を工夫する必要がある。

また、子どもたちが自信をもって学習に取り組むために、練習する機会を多く設定することが必要である。たくさん話したり、聞いたりする活動を繰り返し行うことで、児童の理解が深まり、自信をもつことに繋がっていく。さらに、子どもたち同士のかかわりを通して、お互いの成長を褒め合ったり、認め合ったりすることで、成功体験の積み重ねとなっていくと感じた。

まとめ概要

今回の提案では、『友達のために文房具セットを作り紹介する』という活動を通して、「英語で自分の思いを伝えることができた！」という、成功体験に繋がる授業実践になった。英語を話したり、聞いたりする中で、小さな成功体験を積み重ねていくことが大切である。そのために、児童ができたと感じられるように学習方法を工夫したり、必然性を感じられるようなリアルな場面を設定したりすることが重要である。外国語活動での成功体験は、自己肯定感にも繋がっていく。

担任が行う外国語活動では、小学校ではできる範囲の英語を使う。間違った英語は、児童が吸収してしまうので、なるべく使わない。言葉にできない英語は、絵・写真・動画など、視覚化できるものを利用したり、実演したりして伝えるとよい。どうしても表現できない場合には、無理に英語を使わず、日本語を使ってよいと感じている。

児童の英語力の差に関しては、それぞれの児童の実態に合わせて学習を工夫することが大切である。例えば、英語が得意な児童には、全体で正しい発音の見本を見せたり、教師とのやりとりの相手になってもらったりすることで活躍の場を作る。このようなことが、クラス全体の学びになり、学び合う学習集団をつくることに繋がっていくと感じる。

来年度からは、高学年は教科としての外国語に変わり、「読むこと・書くこと」が加わる。中学年での外国語活動の中で、英語の音声や文字に十分に親しみ、外国語科に繋げていくような授業作りが必要であると感じた。

概要報告

実施期日	7月29日(月)【午前】
部会名	小学校 総合的な学習の時間部会

テーマ

『他者と関わり、協同的に学びあう子どもたちを目指して』

提案概要

社会科の外国調べの学習を通して、姉妹都市についての興味・関心が高まっていったが、姉妹都市にもかかわらず、本市における認知度の低さに課題意識をもつようになった。そこで、本市の人たちに姉妹都市をPRする活動を通して、他者と共同して問題を解決したり、言語により分析したり、まとめたり表現したりするなどの学習活動に取り組んでいきたいと考えた。

【実践の概要】

外国調べ～姉妹都市に目をむけよう～

インターネットや本、大使館の資料を参考に人口、首都、観光、食事、文化、日本とのつながりの観点で調べ、模造紙にまとめ、各自発表する形で取り組んだ。

姉妹都市について調べよう

「姉妹都市はどこにあるのだろうか」「人口はどれくらい」「面積はどのくらい」「なぜ本市と姉妹都市なの」「何が有名なの」等を旅行雑誌、本、インターネットを使い調べた。また、本市秘書広報課による出前授業を実施した。

PR方法を考え、PR活動を行う

3つのプロジェクトチーム（物品を通じてPR、動画を通じてPR、食を通じてPR）に分かれて活動した。どのチームも課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現の学習過程を通して、自分たちの思いを具現化していった。

【成果と課題】

- 授業を通して、次々と出てくる課題に対し、「本気でなんとかしたい」「成功させたい」という主体的に取り組む姿勢が見られるようになってきた。
- 実践から1年後、中学生になった子どもたちにアンケートを実施したところ、この学習で学んだことが汎用的な力として、自分自身の生活に結びついていることがわかった。
- 40時間近く取り組んだ本単元では、関心意欲が徐々に低下していく。意欲を向上させるような活動や声掛けをするタイミングをつかみ、児童の学習意欲を維持することが最大の課題であった。（3つの取り組み・・・①児童の想像を超えた活動 ②メディアの活用 ③社会とのつながりの意識）

質疑応答

- 先生が鋭い視点で物事を捉えている。また、人を探すのがうまいと感じた。地域とのワインワインの関係が大切である。
- 総合的な学習の時間の時数確保が難しいが、どのようにして70時間を確保しているのか。
⇒モジュールを活用している。また、学年でもお願いをした。
- 3つのプロジェクトを進めていくうえで、工夫したことは何か。
⇒同じタイミングではなかなか進まないので、作業等がないチームは他チームでいかせることがないかを相談した。それぞれのチームが休み時間も利用しながら取り組んでいた。担任自身がかなり動いている。
- 学校としてのゴールはどうだったのか。
⇒1クラスだけが突出してしまった。あまり全体に伝えることができなかつた。

- ・総合的な学習の時間を校外学習にあてていることが多い。
- ・素晴らしい実践をされているが、真似できないことが総合的な学習の時間の問題点である。担任の負担が大きい。他に広げていくことが難しい。そんな中でも、人をつなげていくことが重要だと感じた。
- ・若手の先生方に伝えていく難しさ、総合的な学習の時間に対する先生方の捉え方の違いを感じる。一つのテーマを掲げ、学年の実践につなげていくことが望ましい。ただし、学年で動く際には、どうしてもフットワークが重くなる。
- ・様々な活動の中で行き詰まってしまう場面があったが、担任としての見通しはあったのか。
⇒ステッカーやカフェの見通しは持っていた。
- ・市長への訪問について、他のチームは何をしていたのか。
⇒放課後に活動することが多かったので、該当チームだけで動くことができた。子どもたちは放課後でも前向きに取り組んでいた。

グループ協議

- ・総合的な学習の時間は、教師のやりたいことを楽しみながら展開していくことが重要である。担任自身が熱い思いをもって主体的に関わることを大切にしたい。また、校内・保護者等に丁寧に説明していくことも必要である。
- ・地域おこし協力隊に似ていると感じた。ゴールは考えなければならないが、そればかりにしばられることもないよう感じた。

まとめ概要

- ・卒業後の実践。自ら探究的に取り組む。
- ・今回の発表に向けて勤務校でリハーサルを行った。学校全体に実践が広がっている様子がうかがえる。
- ・児童の感想の中に、「子どもだけでもできることは沢山ある」という言葉があった。これから生きていくうえで、「やっていける」そんな力を培うことができた実践だと思う。
- ・このような実践を今後どのようにして学校全体に広げていくかを検討していくかなければならない。
- ・本物との出会いを大切にしながら、子どもたちの思いや気持ちに寄り添ってゴールを設定していくことが重要である。

概要報告

実施期日	7月29日(月) 【午前】
部会名	小学校 特別活動部会

テーマ

『子ども一人ひとりの思いを大切にした学級活動』

～子ども祭に向けての話し合い活動を通して～

提案概要

(現状と課題) ①学級活動の時数は、年間35時間となっているが、その中で話し合いの時間がなかなかとれない。

⇒話し合いをスムーズに行っていくためには、どんなことができるか?

②話し合いが一部の子に限られる。

⇒意見を言わない(言えない)子への手立てはないか?

(1) 研究テーマについて

学習指導要領特別活動の目標(2)には、「集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようとする。」と記載されている。児童の実態としては、こちらから与えた課題については、熱心に取り組むことはできるが、自分で課題を見つけ、自発的に課題を解決することについて、まだ十分でない。そこで、年に1回行われている子ども祭を通して、話し合い活動を行っていこうと考えた。

(2) 話し合いに向けての手立て

- ・計画委員会=司会グループ+提案者+先生を設立する。
- ・希望者が多数いたので、グループを作り交替で行った。
- ・事前準備は、休み時間に行った。「話し合い計画表」をクラス全員が分かるように提示しておいた。
- ・司会グループは、計画を元にして、話し合いの進め方を考えた。
- ・板書計画も事前に子どもたちと考え、時間短縮のため、議題、目的、決まっていることや条件は、授業の前に書いておいた。
- ・賛成・反対意見を見やすいように整理した。
- ・友達の意見は、最後まで聞こう。友達の考えを進んで発表しようという「話し合いの約束」を提示した。
- ・校内研究と関連して、「聴き方・話し方名人」を活用した。

(3) 授業の実際

- ・当初は、出し物を決める話し合いは、1時間を計画していたが、3時間かかった。特に2回目は、自分の意見に強い思いを持つ子が多く、出し物に対しての否定的な意見が、自分を否定されているようにとられたのか、不穏な雰囲気になってしまった。また、意見を言うときにも、もっと相手の気持ちを考えながら伝えればいいのにと感じられる場面もあった。(映像「2回目の話し合いの様子」視聴)
- ・3回目の話し合いに向けて、子どもたちの振り返りや授業中の様子から、聴き方・話し方を改善する必要があるとを考えた。→楽しいことを取り入れる。大事なことは伝える。(1目・耳・心で聞く 2ぴーん 3イエーイ)
- ・前回の内容を踏まえて進んでいった。話し合いの中で意見が絞られ、最終的に多数決で決めることになった。
- ・振り返りの感想には、肯定的な意見が多かった。

【成果】

- 計画委員会を設立したことでの話し合いをスムーズに進めることができた。
- 子どもたちだけで話し合いを進めることができるようになった。
- 賛成・反対意見をもとに、話し合いの中で折り合いをつけ、出し物を決めていくことができた。
- 自分で意見は言えなくても、グループで共有して意見を引き出すことができた。
- その他の取組として「ひょうたん池の清掃」では、子どもたちの主体的・意欲的な姿が見られた。

【課題】

- 話し合いの中で教師がどのように介入していくか。
- 時間がかかる。
- 全員が納得する難しさ。

研究協議概要

* 3～4人のグループ別に、課題①②及び発表の感想等について話し合い、画用紙に記録し、全体で共有した。

【課題①】

- ・国語、総合など他教科を活用する。話合いに慣れさせておく。簡単なテーマで話合いの経験を積み上げていく。
- ・2人か1人で考える時間を確保する。
- ・事前に打合せして流れを確認し、様子を見ながら司会者を助ける。
- ・給食の時間や朝自習の15分間を使うなど、フリートーキングの時間を設定する。
- ・お祭りは、特別活動や総合的な学習の時間で行う。お祭りをなくしたという学校もある。
- ・事前に意見を聞き、短冊に書いておく。意見を集約して、比べ合いから話合いを始めると時間短縮になる。

【課題②】

- ・互いの顔が見えるような話合いの席の配置を工夫する等、環境を整える。
- ・発言者を名簿でチェックする。
- ・ペアやグループで相談する。友だちの意見を聞いて、グループの意見を伝える機会を増やす。
- ・子どもが自ら意見を出すまで待つ。
- ・ハンドサインを決めておいたり、ネームプレートを黒板に貼りに行ったりすることで意思表示をし、自分の意見が反映されたという思いを持てるようにする。
- ・クラス全体で互いに認め合う雰囲気をつくる。
- ・宿題で個人の意見を書かせ、事前に教師がチェックしておき、期間指導の時、声をかけて自信を持たせる。
- ・事前に書いた意見に丸をつけたり、「伝えよう」と教師がコメントを書いたりしておく。
- ・事前のプリントには、めあてや振り返りの欄も設けておく。
- ・グループで事前に個人の意見を書いたものを読み合って、意見を交流させる。
- ・最初に「今日は一言でも発言しよう」など、ルールを決めておく。

【その他 感想等】

- ・「計画委員会」で時間短縮できてよかったです。
- ・子どもたちだけで話合いを進められるようになってよかったです。
- ・話合いのゴールは何か→自分の意見が通るか通らないかでなく、みんなで決めた目的に向かっていくとよい。
- ・型にはめすぎると、子どもが楽しくないのではないか。
- ・最終的に多数決・・・・、どう展開していくかが難しい。
- ・「スムーズな話合い」というのは、教師の思いではないか。意見がたくさん出て難航するのは、「意識が高い」ということで、よいことなのではないか。→少数意見も大事にする。

まとめ概要

事前に計画を立てることで、トラブルを予測し、展開し、経験値を上げる。話合いの質抜きに「自分たちでできた」という成果があった。活動するだけで終わるのではなく、丁寧に振り返りを見取り、子どもに対する評価を上手に活用し、声なき声を拾うことで、自信を与える。意見を言わない子を否定的にとらえるのではなく、自分なりに考えていることを小グループでなら発言できるかもしれないと考え、意見を出せる場を提供する。振り返りから教師が全体につなげてもよい。必ずしもその子が言わなくても、教師またはグループが言えばよい。

振り返りカードを毎回書くことは、まさに「キャリア教育」につながる。この積み重ねや考えがどう変容するか記録を残すことが大事である。「実行できるか」という視点のみでの話合いでは、自由な意見が出なくなる。例えば、お祭りの出し物について話し合う際、議題を「フットサルをやるかやらないか」ではなく、「フットサルならどうやるか」とすると、クリエイティブな話合いになる。「不可能をどう可能にするか」が大事である。

型にこだわりすぎると、話合いの作法の指導になってしまふ。「摩擦の経験（=うまくいかなかったらどうするか）」を子どもたちに葛藤させることや、子どもたちと一緒につくっていくことを大切にする。

共通の掛け声（「イエーイ」）を決めるることは、意識付けにはいいが、完全同調になると、強制的で合意形成にならず、「自分の意見を曲げた」「納得できない」という思いが出てくる。「実践することにより、クラスがまとまり、楽しんでもらうことで自信がつくのではないか」という教師の願いは、アバウトな価値観なので、資質・能力的なことを書くとよい。子どもたちの変遷していく姿がわかる授業実践であった。

概要報告

実施期日	7月29日(月)【午前】
部会名	小学校 特別支援教育部会

テーマ

『人間関係の形成に向けての取組～ともに学び、ともに育つために～』

提案概要

本校の支援教育の基本方針は、「誰もが地域や学校の中で『ともに生き、ともに育つ』という考え方の素地を育む。」「子どもを支援学級か通常学級かというふるい分けの発想から脱却し、障害の有無ではなく、『ニーズをもつ子ども』としてとらえる。」「担任一人だけでなく全職員で児童を支援していくための支援体制を整える。」である。「ともに学び、ともに育つ」という本校の支援教育の基本方針をふまえ、そこに学びの要素を取り入れ、本校の支援学級は、「ともに学び、ともに育つ」という考え方沿って運営している。そのため、在籍児童は、学校生活の多くの時間を主に学年・学級の子どもたちと共に過ごしている。その中で、人とかかわる力や、成長への意欲など育つ力は大きいと考える。そこで、児童がよりよい人間関係を形成していくために、交流級担任を始め、かかわりのある様々な人との連携を意識し、以下のような実践を行った。

「ともに学び、ともに育つ」を支えるもの

教員の仕事に関すること

各支援級担任はそれぞれ学年に所属している。職員室での机の配置は所属学年の場所を基本とし、担任児童の交流級担任と話しやすいよう配慮する。など

教員の意識に関すること

交流級の担任も支援級在籍児童の担任という意識をもつ。など

保護者に関すること

個人面談は、支援級、交流級それぞれで行う。通知表も、支援級、交流級それぞれで作成し、両方を渡す。など

安全に関すること

一斉下校の場合は、各方面に分かれて下校するが、お迎えを必要とする児童は、支援級で待つ。など

支援員に関するこ

年間時数は在籍児童数によって決まる(在籍児童1人あたり240時間)。支援員と連携し、共に児童を支えることを意識する。など

上記のことについて、

子どもの意識に関するこ

支援級児童は、「交流級・支援級とともに自分のクラスで、担任が2人いる」という意識で過ごしている。また、交流級の児童は、「支援級の児童がクラスと一緒にいてあたりまえ」という意識を持っている。児童にとって、支援級は、学校生活を安心して送るためのサポート役という捉えになる。

○成果

- ・支援級の生徒に、みんなで学習したり、活動したりする楽しさや喜びを感じている姿が見られた。
- ・友達の働きかけで学習に参加できる場面が出てきた。
- ・友達からの働きかけが増えた。
- ・友達の理解が深まった(相互理解)。
- ・何でも柔軟に受け入れができる発達段階である1年生の時期から一緒に生活することで、いろいろな子がいて当たり前ということを体験的に学ぶことができ、それと同時にかかわり方も学んでいる。
- ・交流級の保護者に、支援級在籍、通常級在籍に関係なく、「ともに学び、ともに育つ」ことへの理解が得られてきている。

○課題

- ・通常級の児童に、支援級在籍児童が学級にいることが当たり前という意識があるため、支援級での活動のために教室を抜けることについての説明が難しい。
- ・支援級在籍児童が、支援級での活動を行っているときに、交流級の授業が進んでしまうのではと不安に思う気持ちへの配慮が必要。
- ・学年が上がるにつれて、学習の参加について工夫が必要となる。
- ・支援級であることを一切公表しないことを条件に在籍している児童がいる。
- ・支援級担任同士、交流級担任や支援員との打合せ時間が十分に確保できない。
- ・人的補助及び研修が不十分である。
- ・支援教育における小中連携の在り方について。

質疑応答

①支援級では、教科交流が少ない在籍児童に対してどのような支援体制をとっているのか。

- ・基本的には交流級での学習活動を中心としているが、児童によって交流の形はさまざまである。

②現在のような支援体制のモデルはあったのか。

- ・30年ほど前から現在のような交流を中心とした体制づくりを目指して取り組んできた。モデルがあるかどうかは把握していない。

③職員室での教員の席はどのように配置されているのか。

- ・1人が複数の学年を担当することがあるため、できるだけ担当学年の近くに席を配置してもらうようにしている。

④教員の配置はどのようにしているのか。

- ・基本的なスタンスとしては、担任4人で全児童にかかわっていけるようにしている。また、在籍とは別に指導担当があり、各担任で分担して担当をしている。

⑤交流級担任とはどのように連携を図っているのか。

- ・放課後の時間を中心に、常に雑談をするような形で担当児童についての情報を共有するよう努めている。

⑥支援級担任同士の打合せの時間はどのように確保しているのか。

- ・打合せの時間を日常的にとることは難しく、以前からの課題でもある。そのため、日頃からこまめに会話をすることを意識している。また、週に1度は情報交換の時間を確保するよう努めている。

⑦家庭への知らせ（評価）はどのようにしているのか。

- ・交流級担任からの通知表（通常級の書式）と支援級担任からの通知表（支援級の書式）の2種類を作成して渡している。通常級の書式の通知表については、児童の実態に応じて、保護者と相談しながら目標や評価の内容を変更することもある。

まとめ概要

- ・打合せの時間を確保することが難しいという課題は常にある。その解消のためにも、日頃から、担任する児童に関わる人達と立ち話をすることがとても大事である。ちょっとした時間に情報を共有できることが望ましい。
- ・支援を必要とする児童には、失敗体験ではなく、できるだけ成功体験を積ませてあげたい。そのために、新たに取り組むことについては事前に確認しておくことが大切である。
- ・子ども同士の関係からの学びをとても大切にした実践である。支援を必要としている子どもは、どうしても大人とのやりとりが中心となってしまう場合が多いが、同世代の子ども達から学ぶことがとても大事になってくる。
- ・交流及び共同学習では、児童が何を学ぶのか、何を学べたのか、その目標やねらいを簡単に設定して取り組んでいくことが大切である。
- ・支援員との打合せについて、なかなか時間を確保することが難しいが、ある特別支援学校では、学校のポータルサイトを活用して、時間があるときに気がついたことを記入してもらうなどの事例もある。